

あほう鳥の鳴く日

小川未明

青空文庫

若^{わか}者^{もの}は、小^{ちい}さいときから、両^{りょう}親^{しん}のもとを離^{はな}れました。そして諸^{しよ}所^{しょ}を流^{なが}れ歩^{ある}いていろいろな生^{せい}活^{かつ}を送^{おく}っていました。もはや、幾^{いく}年^{ねん}も自^じ分^{ぶん}の生^うまれ^た故^こ郷^{きやう}へは帰^{かえ}りませんでした。たとえ、それをお^{おも}い出^だして、なつかしいと思^{おも}つても、ただ生^{せい}活^{かつ}のまにまに、その日^ひその日^ひを送^{おく}らなければならなかつたのであります。

もう、十七、八になりましたときに、彼^{かれ}は、ある南^{なん}方^{ぽう}の工^{こう}場^{じやう}で働^{はたら}いていました。しかし、だれでもいつも健^{けん}康^{かう}で気^き持^{もち}ちよく、暮^くらされるものではありません。この若^{わか}者^{もの}も病^び気^きにかかりました。

病氣びようきにかかつて、いままでのように、よく働はたらけなくなると、

工場こうじようでは、この若者わかものに、金かねを払はらって雇やとつておくことを心こころよ

く思おもいませんでした。そしてとうとうある日ひのこと、若者わかものに暇ひま

をやつて工場こうじようから出だしてしまつたのです。

べつに、頼たよるところのない若者わかものは、やはり自みづから、勤つとめる口くちを

探さがさなければなりませんでした。

彼かれは、それからというものは毎まい日にち、あてもなく、あちらの町まち

こちらの町まちとさまよつて、職しよくを求もとめて歩あるいていました。

空そらの色いろのうす紅あかい、晩方ばんがたのことでありました。彼かれは、疲つかれた

足あしをひきずりながら、町まちの中なかを歩あるいてきますと、あちらに人ひとがた

かつていました。

何事なにことがあるのだろう？

と思つて、

若者わかものはその人ひとだかりの

しているそばにいつてみますと、

汚きたならしい

少年しょうねんをみんながと

りかこんでいるのであります。

「さあ、赤あかい鳥とりを呼よんでみせろ。」と、

一人ひとりがいますと、また、

あちらから、

「さあ、白しろい鳥とりを呼よんでみせろ！」とどなりました。

汚きたならしい

ふうをした子供こどもは黙だまつて立たつていました。

「どんな鳥とりでも呼よんでみせるなんて、おまえは、うそをつくのだ

ろう？　なんで、そんなことがおまえにできてたまるものか！」

と、

人々ひとびとは口々くちぐちにいつて

冷笑あざわらいました。

すると髪かみの毛けの伸のびた、

顔色かおいろの黒くろい、

目めの落おちくぼんだ子供こども

は、じろじろとみんなの顔を見まわしました。

「私は、けっして、うそをつきません。山にいて、いろいろほかの人間のできないことを修業しました。ほんとうに、みなさんが赤い鳥が呼んでほしいならば、どうか、私に、今夜泊まるだけの金をください。私は、すぐに呼んでみせましょう。」といいました。

群衆の中には、酒に酔った男がいました。

「ああ、呼んでみせろ！ もし、おまえが呼んでみせたら、いくらでも、ほしいほどの金をやるから。」といいました。

子供は、うなずいて、空を仰ぎました。雲はちぎれちぎれに高らかに飛んでいました。そして、日がまったく暮れてしまうのに

は、まだ間があつたのです。

たちまち、鋭い口笛のひびきが子供の唇から起こりました。

子供は、指を曲げてそれを口にあてると、息のつづくかぎり、吹きならしたのであります。

このとき、紅みがかつた、西の空のかなたから、一点の黒い小さな影が雲をかすめて見えましました。やがて、その黒い点は、だんだん大きくなつて、みんなの頭の上の空に飛んできたのです。そして、あちらの町の建物の屋根に止まりました。

それは、夕暮れ方の太陽の光に照らされて、いつそう鮮かに赤い毛色の見える、赤い鳥でありました。

「さあ、このように赤い鳥が飛んでまいりました。」と、子供は

いいました。

「あんな遠くでは、赤い鳥だかなんだかわからない。もつと近く、

あの鳥を呼んでみせろ！」と、酒に酔った男が叫びました。

子供は、ふたたび高らかに、口笛を吹き鳴らしました。する

と、赤い鳥は、すぐみんなの頭の上の電信柱にきて止まりま

した。

「おい、あの鳥を手につかまえてみせろ。」と、このとき、見てい

た一人がいました。

「私には、あの鳥をつかまえることもできますが、今日はそんなこ

とをいたしません。」と、子供は答えました。

「なんで、おまえは捕まえてみせないのだ？」

「私は、ただ赤い鳥をここへ呼んだばかりです。」

「捕まえてみせなければ、金をやらないぞ。」と、群衆は口々に叫びました。

「赤い鳥を呼んでみせろというだけの約束であつたのです」と、子供は答えました。けれどみんなは、口々に勝手なことを喚いて、承知をしませんでした。

「手に捕まえてみせなけりや、金をやらない。」と、酒に酔つた男もいいました。

「私は、お金はいりません。そのかわり、今夜この町へ、黒い鳥をたくさん呼んでみせましょう。」と、子供はいいました。

黒い鳥という言葉は、なにか不吉なことのよう、みんなの耳

に聞きかれたのです。けれど、だれも心こころから、ほんとうに信しんずるものはありませんでした。なんでもおまえにそんなことができるものか？ この赤あかい鳥とりの飛とんできたのは、偶ぐう然ぜんだったろうといわぬばかりの顔かおつきをして、この汚きたならしい子供こどもの姿すがたを見守みまもっていました。

そのとき、だれか、小石こいしを拾ひろつて、電でん信しん柱ばしらの頂いたに止どまつている赤あかい鳥とりを目めがけて、投なげました。赤あかい鳥とりは驚おどろいて、雲くもをかすめて、ふたたび夕ゆう空ぞらを先刻さつききた方ほうへと、飛とんでいつてしまいました。

子供こどもは、しょんぼりとそこを立たち去さりました。この哀あわれな有あり様さまを見みた若わか者ものは、群ぐん衆しゅうを憎にくらしく思おもいました。自分じぶんも困こまつ

ていたのですけれど、まだわずかばかりの金かねを持もっていましたの
 で、その金かねの中なかから幾いく分ぶんかを、子供こどもに恵めぐんでやりました。子供こども
 は、たいそう喜よろこんで幾いくたびも礼れいをいいました。そして、忘れわすまい
 とするように、じつと若わか者ものの顔かおを見み上あげていました。

その晩ばんのことであります。空そらはいい月つき夜よで、町まちの上うえを明あかるく昼ひ
 間まのように照てらしていました。どこからともなく、口くち笛ぶえの聲こえが
 起おこりますとたちまちの間に、黒くろい鳥とりが、たくさん月つきをかすめて、
 四ほう方う方うから飛とんできて、町まちの家いえ々いえの屋や根ねに止とまりました。

町まちの人ひとたちは、みんな外そとに出でて、この黒くろい鳥とりをながめしました。
 そして、こんな鳥とりが、どこから飛とんできたのだらうと怪あやしみまし
 た。

しかし、今日の暮れ方、町で、あの汚らしいふうをした、髪の毛のびた子供が、みんなからからかわれていた有り様を見た人たちは、あの子供がだまされたために、復讐をしたのだろうということを知りました。なんという名の鳥か、だれも、この黒い鳥を知っているものがありませんでした。その鳥は、からすよるか、形が小さかったのであります。その鳥は、黙っていました。そのうちに、また、一羽残らず夜のうちに、どこへか飛んでいてしまいました。町の人たちは、なにか悪いことがなければいいかと、おそれていました。

「あの汚らしいふうをした乞食の子は、悪魔の子だ。見つければいいにひどいめにあわせて、この町の中から追い払ってしまえばいい

い。」と、ある人々ひとびとはいっていました。

数日後すうじつごのこと、若者わかものは、雇われ口やとぐちを探さがしながら歩いていま
すと、先日せんじつの汚きたならしいふうをした子供こどもが、職人しよくにんてい体の男おとこにい
じめられているのを見みました。

「おまえは、どこから、この町まちへなどやってきたのだ。このごろ
は町まちにろくなことがない。火事かじがあつたり、方々ほうほうでものを盗ぬすま
れたりする。なんでも、口笛くちぶえを吹ふく子供こどもがあやしいといううわ
さだが、おまえは口笛くちぶえを吹ふくか？ はやく、どこかへいってし
まえ。」と、男おとこは子供こどもをにらみつけて、胸むねのあたりを突ついて、あ
ちらへ押おしやっていました。

子供こどもは、黙だまって、うつむいていました。これを見みた若者わかものはそ

ばへやつてきました。

「かわいそうなことをするものでありません。この子供は、あなたに悪いことをしましたか？ 口笛を吹くということが、どうして悪いのですか？」と、若者は、職人体の男をなじりました。

職人体の男は、振り向いて、

「この子は、悪魔の子です。この子供が町にはいつてからというもの、ろくなことがない。」といいました。

「そんな理由のあるはずがありません。私は、それを信ずることができません。」と、若者はいいました。

職人体の男は、返す言葉がなく、あちらにいつてしまいま

した。

まもなく、五、六人連れの乱暴者がやつてきました。そして、

いきなり、汚らしいふうをした哀れな子供をなぐりつけました。

「おまえだろう、口笛を吹いて、夜中に、黒い鳥を呼んだりす

るのは？ 火をつけたのも、おまえにちがいない。また、方々

へ泥棒にはいったのも、おまえにちがいない。」と、彼らは口

ちぐち

々にのしりました。

このとき、子供は、なんといつて弁解をしても、彼らはきき

いれませんでした。そして、つづけざまにに子供をなぐりつけま

した。これを見た若者は、あまりのことに思つて、

「なぐらなくてもいいでしょう。口笛を吹いて、鳥を呼んだこ

とと、火事^{かじ}や、泥棒^{どろぼう}とが、なんの関^{かん}係^{けい}があるのですか？ お

おぜいで、こんな子供^{こども}をいじめるなんてまちがってはいませんか

。一と、若者^{わかもの}は、彼^{かれ}らの乱暴^{らんぼう}を止めようとしていいました。

彼^{かれ}らは、これを聞^きくと、かえってますます怒^{おこ}りました。

「なにもおまえの知^しつたことじゃない。おまえは、この小^{ちい}さい悪^{わる}

い奴^{やつ}の仲間^{なかま}なのか？ 生^{なま}意^{いき}気^きな奴^{やつ}だからいつしよになぐつてしま

え！」といつて、彼^{かれ}らは、若者^{わかもの}の手^てや、足^{あし}や、顔^{かお}や、頭^{あたま}を、か

まわす思^{おも}うぞんぶんになぐりつけました。

若者^{わかもの}の鼻^{はな}からは、血^ちが流^{なが}れました。そして、子供^{こども}と若者^{わかもの}の

二人^{ふたり}は、これらの乱暴^{らんぼう}者^{もの}から、ひどいめにあわされました。彼^{かれ}

らは、思^{おも}うぞんぶん^{ふたり}に二人^{ふたり}をなぐると、

「さあ、さつさと早くこの町まちから、どこへでもいつてしまえ。まごまごしていると、また見つめて、こんどは許ゆるしておかないから。」
 残のこして、これらの乱暴者らんぼうものは去さつてしまいました。
 子供こどもは、若者わかものに二度助けられましたので、どんなにか、ありがたく感じたかしれません。若者わかものが、自分じぶんを助けるために、鼻はなから血ちを出だしたことを知しると、ただすまなく思おもつて、幾いくたびも礼れいを申もうしました。

「そんなに、お礼れいをいわれると困こまります。私は、良りよう心しんが、不正せいを許ゆるさないために、戦たたかいましたばかりです。」と、若者わかものは答こたえしました。

ふたり
二人は、とぼとぼ話はなしながら、町まちを出ではずれて、あちらに歩ある

いていきました。

「これから、あなたは、どこへおゆきなさいですか。」と、子供

は、若者わかものにたずねました。

「私わたしはいままで、ある工場こうじようで働いていましたが、病氣びようきにな

つたために、その工場こうじようから出だされました。そして行き場ゆきばがな

く、毎日雇われ口ぐちを探さがしているのです。」と、若者わかものは答こたえま

した。

すると、子供こどもは、

「私わたしは、山やまにいたとき、口笛くちぶえを吹いて、いろいろな珍めづらしい鳥とりを、

捕つかまえることを覚えおぼえました。その珍めづらしい鳥とりの一羽わを持もつてあちら

のにぎやかな港みなとにいつて、金かねのある人ひとたちに売うれば、困こまらずに暮く

らしてゆくことができるのです。しかし、鳥をほんとうにかわい
 がる人は少ないのです。鳥がかわいそうでなりませんから、鳥を
 捕つて売ることはいたしません。私は、独りでさびしいときには、
 いままで、いろいろな鳥を呼んで、その声をきくことを楽しみに
 しました。また、私は、これから西にゆきますと、広いりんご畑
 があつて、そこでは人手のいることを知っています。そのりんご
 畑の持ち主を、私は、まんざら知らないことはありません、その
 主人に、私は、あなたを紹介しましょう。そして、私も、
 あなたといつしよに働いてもいいと思います。これから、二人は、
 そこへいって働こうじやありませんか。」といいました。

若者は、これをきいて、たいそう喜びました。そして、二人

は、西にしの方ほうにあるりんご畑ばたけをさして旅たびをいたしました。

ふたり二人は、りんご樹じゅの手入れていをしたり、栽培さいばいをしたりして、そ

こでしばらくいっしょに暮くらすことになりました。二人ふたりのほか

も、いろいろな人ひとが雇やとわれていました。若者わかものは、金きんや、銀ぎんに、

象眼ぞうがんをする術じゆつや、また陶器とうきや、いろいろな木箱きばこに、樹木じゅもくや、

人間にんげんの姿すがたを焼やき付つける術じゆつを習ならいました。

りんご畑ばたけには、朝晩あさばん、鳥とりがやつてきました。子供こどもは、よく口く

笛ちぶえを吹ふいて、いろいろな鳥とりを集あつめました。そして、鳥とりの性せい質しつ

について若者わかものに教おしえましたから、若者わかものは、人間にんげんや、自然しぜんを

彫刻ちようこくしたり、また焼やき画えに描えがいたりしましたが、鳥とりの姿すがたをい

ちばんよく技術ぎじゆつに現あらわすことができましたのであります。

しかし、二人は、幾年かの後に、また別れなければなりません。子供は、青年になりました。そして、若者も年をとりましたから、二人は、もつと広い世の中に出ていつて、思った仕事をしなければならなかったからです。

「私は、汚らしいふうをして、町の中をうろついていたときに、あなたに助けられました。あなたは、自分の身を忘れて、私を救ってくださいました。」と、その時分子供であつた青年はいいました。

「ほんとうに、もう思い出せば幾年か前のことであります。私は、病氣をして職を失つているときに、あなたにあつて、このりんご園へつれられてきました。そして、ここで幾年か月日を

過すごしました。私わたしは、ここにきたがためにいろいろの技ぎ術じゆつを覚おぼ

えることができました。これから、また方々ほうぼうを渡わたつて、もつと

いろいろのことを知しつたり、見みたいと思おもいます。」と、当時とうじの若わ

者ものは、もういい働はたらき盛さかりになつていて、ここう答こたえました。

「おたがいに、この世よの中なかから、美うつくしい、喜よろこばしいことを知しりま

しょう。私わたしは、あなたが、私わたしのために乱暴者らんぼうものからなぐられて、

血ちを流ながされたことを一いっし生しょう忘わすれません。」

「いえ、いつかも、いいましたように、けつしてあなたのためで

はありません。たとえその人ひとがあなただでなくても、だれであつて

も、弱よわいものを、ああして乱暴者らんぼうものがいじめていましたら、私わたしは、

良り心ようしんから、命いのちを投なげ出だして戦たたかつたでしょう。」と、昔むかしの若わかも

者のはいいました。

「みんなが、そのような、正しいただ考えかんがを持つていましたら、どんなにこの世よの中なかがいいでしょう？ 私は、この話はなしをみんなに知しら

したいと思おもいます。私は、珍めづらしい鳥をあなたにあげますから、いつまでも飼かつてやってください。そして、私わたしを忘わすれずにいてくだ

さい。」と、昔むかしの子供こどもはいいました。

口笛くちぶえを上じょうず手に吹ふく彼かれは、山やまの方ほうへはいつていきました。そして、どこからか、一羽わの珍めづらしい鳥を捕つかまえてきました。

「なんという鳥とりですか。」と、年上としうえの若者わかものがきくと、

「どうか、あほう鳥どりという名なをつけておいてください。この鳥とりをあなたにさしあげます。」と、年若としわかの子供こどもは答こたえた。

ふたり
二人は、ついに南と北に別れました。

それから、幾十年……たつたことでしょう。ある町の二階を借

りて、年とつた男が、鳥と二人でさびしい生活をしていました。

おとこあたまかみはんぶんしろ

男は頭の髪が半分白くなりました。鳥も年をとってしまいま

した。男は、鳥の焼き画を描くことや、象眼をすることが上

手でありました。終日、二階の一間で仕事をしていました。

その仕事場の台の前に、一羽の翼の長い鳥がじつとして立って

ます。ちようど、それは鋳物で造られた鳥か、また、剥製のよ

うに見られたのでありました。

男は、夜おそくまで、障子を開け放して、ランプの下で仕事

をすることもありました。夏になると、いつも障子が開けてあ

りましたから、外そとを歩あるく人ひとは、この室しつの一部ぶを見上みあげることでも
 きました。

ちようど隣となりの家いえの二階かいには、中ちゅう学がく校こうへ、教おえにしえ出でる博はく物ぶつ
 の教き師ょうしが借かりていました。博はく物ぶつの教き師ょうしは、よく円えん形けいな眼め
 鏡がねをかけて、顔かおを出だしてここちちららををののぞくのであります。

博はく物ぶつの教き師ょうしは、ああごにひひげげををははややしてしている、ききわわめめてて気き軽がる
 な人ひとでありましたが、いいつも剥はく製せいの鳥とりを、なんだなんららう？ つい
 ぞ見みたことことののない鳥とりだが、と思おもつていました。男おとこが、気きむむずずかかし
 い顔かおををして仕し事ごとををしてしているので、つつい口くちを出だささずずににいましたが、
 ある日ひのこと、教き師ょうしは、

「あれは、なんという鳥とりの剥はく製せいですか？」と、唐とう突とつににききま

した。

下を向いて仕事をしていた男は、隣の屋根から、こちらを向いて、みような男が顔を出してものをいったので、気むずかしい顔を上げてみましたが、急に笑顔になって、

「やあ、お隣の先生ですか。さあ、どうぞ、そこからお入りください。」と、男はいいました。

男は、その人が、学校の先生であるのを、前からものこそいわなかったけれど、知っていたのです。

「なんとという鳥ですか？ 珍しい鳥ですな。」と、先生は、いろいろなともせずになぞねたのであります。

「あほう鳥といひます。」と、男は答えました。

「あほう鳥^{どり}？」といつて、先生^{せんせい}は、聞^きいたことのない名^ななので、
 びつくりしたように目^めを円^{まる}くしました。

「なんにしてもいい剥^{はく}製^{せい}ですな。」と、先生^{せんせい}は、ため息^{いき}をも
 らしました。

「いや、剥^{はく}製^{せい}ではありません。生^いきているのです。もう年^{とし}をと
 ったので、いつもこうして眠^{ねむ}っています。」と、男^{おとこ}は答^{こた}えました。

先生^{せんせい}は、不思議^{ふしぎ}なことが、あればあるものだど、ふたたび、
 びつくりしました。この先生^{せんせい}もどちらかといえば、あまり人^{ひと}と
 交^{こう}際^{さい}をしない変^{へん}人^{じん}でありましたが、こんなことから、隣^{とな}の男^{おとこ}
 と話^{はなし}をするようになりました。

ある朝^{あさ}、あほう鳥^{どり}が鳴^なきました。男^{おとこ}は、なにかあるな？ と胸^{むね}

おも
に思いました。

はたして、隣となりの先生せんせいがやつてきました。そして、大事だいじに扱うあつかから、ちよつとあほう鳥どりを学校がっこうへ貸かしてくれないかと頼たのみました。男おとこは、あほう鳥どりをひとり手放てばなすのを氣遣きづつて、自分じぶんも学校がっこうまで先生せんせいといつしよについていきました。

こんなことから、男おとこは、多数たすうの生徒せいとらに向むかつて、昔むかし、南みなみのあ
る町まちを歩いているときに、子供こどもを助たすけたこと、それから、その子こ
どもどもといつしよに働はたらいたこと、子供こどもは、どんな鳥とりでも自分じぶんの友だち
にすることができたこと、この鳥とりは、その青年せいねんが分わかれるときに
くれて、いままで長い月日ながつきひの間あいだを、この鳥とりと自分じぶんは、いつしよに
生活せいかつをしてきたことなどを、物語ものがたったのであります。

それから、正しょう直じきな「鳥とりの老ろう人じん」として、この町まちの付ふ近きんに
 は評ひょう判ばんされました。この人ひとの、鳥とりの焼やき画えや象ぞう眼がんは、急きに、
 名めい人じんの技ぎ術じゆつだとうわさされるにいたりしました。

暗くらい、夜よるのことでもあります。この年としとつた男おとこは、ランプの下したで
 仕し事ごとをしていきますと、急きにじつとしていたあほう鳥どりが羽はばたきを
 して、奇き妙みょうな声こえをたてて、室しつの中なかをかけまわりました。いまま
 でこんなことはなかったのです。

「おまえは、気きでも狂くるつたのではないか！」と、男おとこは、鳥とりに向むか
 っていました。けれど、鳥とりは、なかなかおちつくようすはあり
 ませんでした。

「先せん生せいに、きてみてもらおう。」と、男おとこは、もうこのごろでは、

親したしくなつた、隣となりの先生せんせいを呼よんだのでありました。

「鳥とりは、ものに感かんじやすいというから、今夜こんや、変かわつたことがあるのかもしれない。あるいは地震じしんでもな……気きをつけましょう。」

と、先生せんせいは、しきりに騒さわぐ鳥とりを見みながらいいました。

はたして、その夜よ、この町まちに大火たいかが起おこりました。そして、ほとんど、町まちの大半たいはんは全滅ぜんめつして、また負傷ふしやうした人ひとがたくさんありました。

この騒さわぎに、あほう鳥どりの行方ゆくえが、わからなくなりました。男おとこはどんなにか、そのことを悲かなしんだでしょう。彼かれは、焼やけ跡あとに立たつて、終しゆうじつ日にち、あほう鳥どりの帰かえつてくるのを待まっていました。しかし、とうとう、鳥とりは帰かえつてきませんでした。煙けむりに巻まかれて、焼やけ

死んだものか、南みなみの故郷こきやうに、逃にげていったものか、いずれかでなければなりません。

「私は、べつに、この町まちにいなければならない身みではないのです。もう一度、鳥どりのすんでいた国くににいつてみようと思います。」と、男おとこは、先生せんせいにいいました。

「そうですか、そんなら、私わたしも、あなたといつしよにいつて、その口笛くちぶえの名人めいじんについて、珍めづらしい鳥とりの研けん究きゆうをいたします。」と、先生せんせいがいました。

こうして、男おとこと先生せんせいは、旅たびに出でかけました。遠とおくそらの空しろに、白くもくもただよい雲うみが漂ただよっていました。三人にんが落おち合あった日ひ、どんな話はなしを、たがいむつに睦むつまじく語かたり合あうでありましよう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年9月

※表題は底本では、「あほう鳥《どり》の鳴《な》く日《ひ》」
となっています。

※初出時の表題は「阿呆鳥の鳴く日」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あほう鳥の鳴く日

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>